

国語辞典の活用で育つ学習力

京都女子大学教授 吉永 幸司よしなが こうし

一 「国語辞典を写すなんて無駄」と言っ子

学校が斡旋する学用品では少し高価と思えるものに国語辞典がある。購入したときは授業で活用するが、いつの間にか机の中にしまい込まれたりして、買ったばかりの真新しさで片づけられることが多いからである。

そのようにならないことを心に決めて、積極的に活用したことがあった。そのきつかけは

「先生、辞典に書いていることを写すなんて無駄や。」と言っ子の発言であった。言葉の定着を意図し、調べた語句の意味をノートに写させていたときであった。

「調べた言葉に線で印を付けたらいいのや。」と、提案をする子もいた。話し合いの結果、調べた証拠として赤鉛筆で印を付けるという約束を決めた。

二 調べた印を残すことで勢いづく子ども

今なら、ラインマーカーを利用してということになるのだろうが、そのころは、色鉛筆で印を付けるというのが精一杯の知恵であった。四年生の特性であるうか、調べ方や方法が理解できると、学習に勢いが出てきた。教科書の難しい語句調べはもちろんのこと、知っている言葉を調べることも興味を示す子が増えていった。

『空気』ってどう書いてるだろう。」

「辞典のいちばん最後はどんな言葉だろう。」

「知っている語句を調べてみよう。」

など、話が弾む。語句を調べるのも楽しいが、真新しいページに印が増えていくのもうれしいのである。さらに、言葉の意味を予想してから調べるといいうちに学習方法も多様に広がっていった。

国語辞典で語句を調べることのよさは、意味を確かに

することもあるが、調べる回数に比例してスピードを増すということである。一つの語句を調べるのに二、三分という時間を必要としたのに、一分を超えないで調べることができるようになる。このことが子どもにとって快感であったようだ。その勢いは、社会や理科でも辞典を机の横に置いて学習をするようになった。

三 国語辞典が宝ものと言える子に

縁あって、その子たちと卒業まで国語の勉強でかわるようになり、国語辞典の活用には拍車がかかった。

国語辞典に使い慣れ、素早く引く、調べた印としての赤色の線が増えるなど、さらに勢いが増した。一度調べた言葉を何度か調べるうちに、意味を覚えてしまっ子も出てきた。わからない語句、自信がない語句は、辞典で確かめるということが習慣になり、指示がなくても自分で調べる子が増えていった。そんな教室の中で、特に印象に残っているのが孝夫君（仮名）である。

彼は、家庭では辞典をテレビの横に置き、難しい言葉が出てくると必ず調べるということを続けた。その結果、卒業までには、目標とおりほとんどのページに線を引き、証拠を残した。その彼から後日、次のような便りが届いた。「小学校の勉強でいちばん役立ったのは、辞典で調べ

る習慣がついたことです。中学校で地理がいちばん得意な勉強です。テレビや新聞の言葉を辞典で調べ続けたからです。あの辞典はばくの宝です。」

調べた言葉に印を残すという遊び心にも似た試みが、一人の少年の学びの道標になったようであった。

